

話題提供 4

「カリキュラム・イノベーションの理論的・実践的研究 教育連携校の視点から」

村石 幸正

(附属中等教育学校)

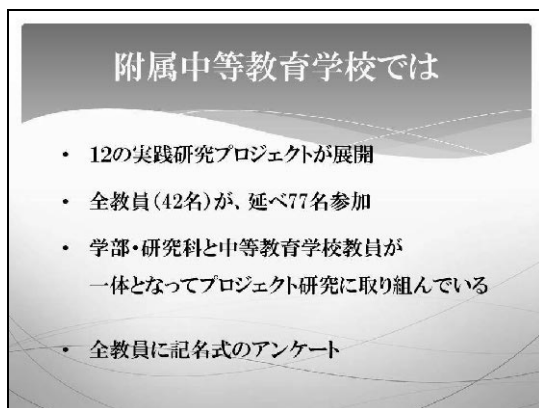
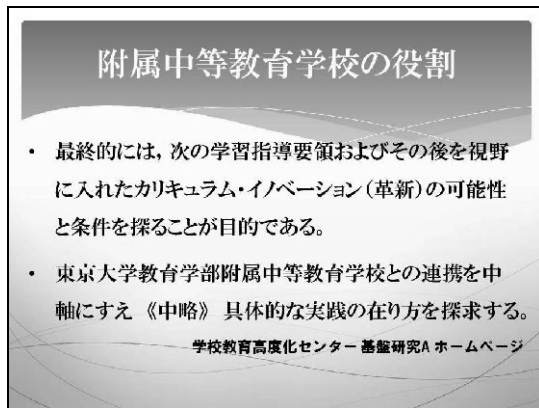


図1

今回のイノベーション科研において、附属中等教育学校では12の実践研究プロジェクトが展開されました。「ライフキャリア教育の可能性の検討—社会的レジリエンスを高めるために」「共生の作法と技法を育てる学習プログラムの開発」「教育の職業的意義」「中等教育段階における文法指導に関するカリキュラムと指導法に関する調査研究」「シティズンシップ教育のカリキュラム開発」「数理能力の育成プロジェクト」「中等教育と高等教育の接続」「メタ学習プロジェクト」の①と②、「学校現場における予防的心理教育授業に関する研究」「効果的な探究型学習の

進め方と学校図書館の関係についての研究」です。そして、今回のイノベーション科研を始めるに当たり、附属学校から研究テーマを一つ出させてもらうことができました。それが「中等教育学校における総合的な学習の在り方」です。

先ほど来、「附属の先生のほぼ全員が参加」という微妙な表現がされていますが、実は参加していなかったのは私だけです。私は管理職なので授業は週に4コマしか持っておらず、それも5年生の物理です。そのため、なかなか乗りにくいところもあって形式的には参加していませんが、残りの全教員、のべ77名がこのプロジェクトに参加しています。

1. アンケート調査

イノベーション科研は、本年度で最終年度を迎えます。そこで先日、全教員に記名式のアンケートを取りました。

本校は中等教育学校、いわゆる中高一貫校ですが、実はもともと大学に入学させるための教育をしていないというイメージが非常に強くありました。具体的に言うと、高2~3の2年間、「卒業研究」という名称で、自分が決めたテーマに取り組みせて、レポートを書かせています。レポートの提出日が高3の9月1日なので、最後の夏休みをレポートに費やしてしまい、保護者や生徒からだいぶ文句を言われたこともあります。それでも気にせず続けていました。高2~3の間は大学入試のための補習授業も一切ありません。そういう意味では、学習指導要領の教科の枠組内での取り組みに対して、あまり強い抵抗感がないという素地があると思います。そのことを念頭に置いて聞いていただくとよいかもしれません。

1-1.特定のプロジェクトの成果について:成果を学習指導要領に取り入れることは可能と思うか

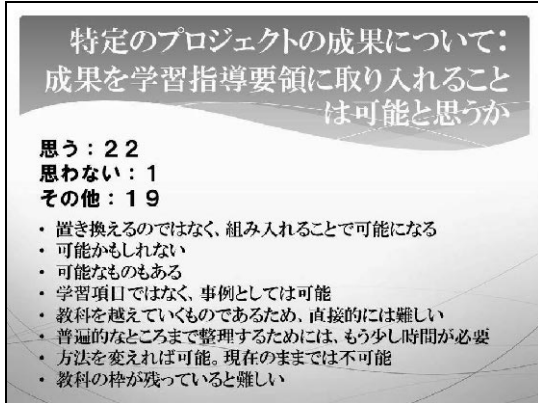


図2

まず、自分の所属しているプロジェクトの成果を学習指導要領に取り入れることは可能と思うかという問いです。「思う」が22名、「思わない」が1名、「その他」が19名でした(図2)。「その他」には、「置き換えるのではなく、組み入れる」、あるいは単純に「可能かもしれない」「可能なものもある」「学習項目ではなく、事例としては可能」「教科を越えていくものであるため、直接的には難しい」「普遍的なところまで整理するためには、もう少し時間が必要」「方法を変えれば可能。現在のままでは不可能」「教科の枠が残っていると難しい」といった回答がありました。附属の教員は、先ほど小玉先生がおっしゃったような意味でのイノベーション科研の取り組みではなく、現在の学習指導要領を前提にこの質問を捉えているようです。

1-2.どのような内容と置き換えることができると思うか

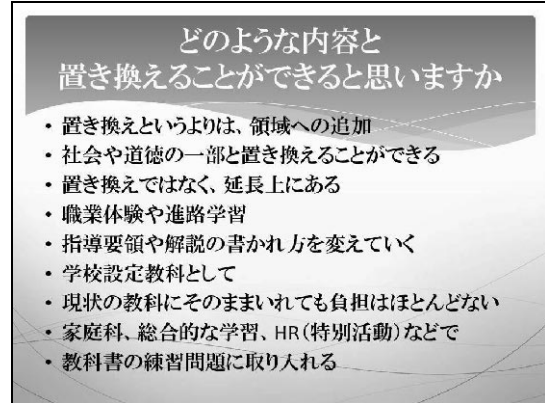


図3

どのような内容と置き換えることができると思うかという質問に関しては、「置き換えというよりは領域への追加」「社会や道徳の一部と置き換えることができる」「置き換えではなく、延長上にある」「職業体験や進路学習」「指導要領や解説の書かれ方を変えていく」「学校設定教科として」「現状の教科にそのまま入れても負担はほとんどない」「家庭科、総合的な学習、HR(特別活動)などで」「教科書の練習問題に取り入れる」などの意見が出ました(図3)。

1-3.置き換えによってどのようなイノベーションがもたらされるか

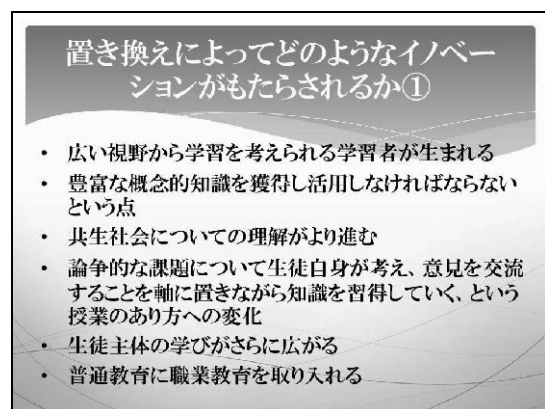


図4

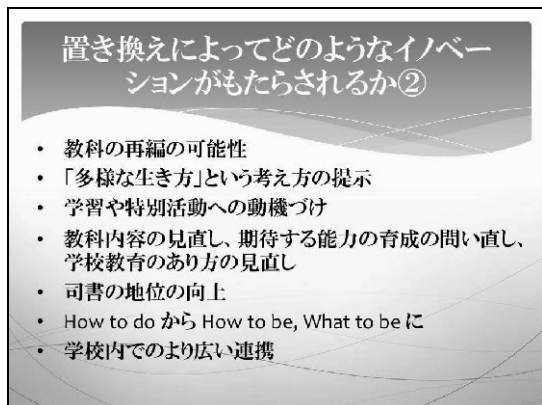


図5

さらに、置き換えによってどのようなイノベーションがもたらされるかという問いに関しては、「広い視野から学習を考えられる学習者が生まれる」「豊富な概念的知識を獲得し活用しなければならないという点」「共生社会についての理解がより進む」「論争的な課題について生徒自身が考え、意見を交流することを軸に置きながら知識を習得していくという授業の在り方への変化」「生徒主体の学びがさらに広がる」「普通教育に職業教育を取り入れる」「教科の再編の可能性」「『多様な生き方』という考え方の提示」「学習や特別活動への動機付け」「教科内容の見直し、期待する能力の育成の問い直し、学校教育の在り方を見直し」「司書の地位の向上」「How to do から How to be, What to be に」「学校内でのより広い連携」などの回答がありました(図4-5)。

ここで言う「学校内でのより広い連携」とは、教科の枠を取り払った取り組み、あるいは教科という概念そのものではなく、学校における教育そのものであるようです。

1-4. 今回の実践で生徒はどのように変わったか

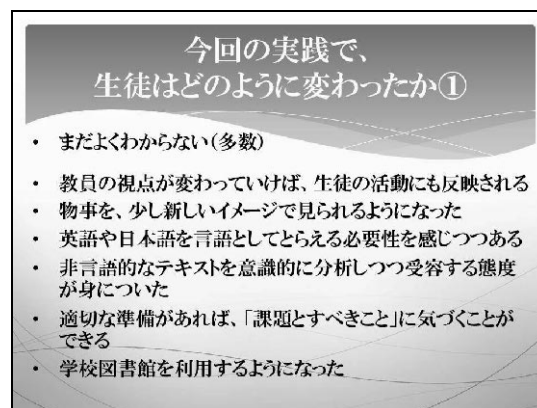


図6

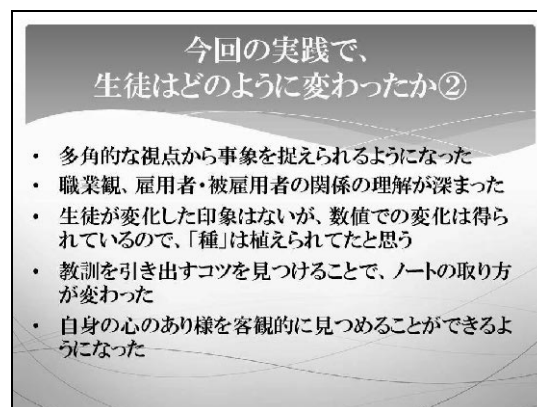


図7

本プロジェクトは3年間行いましたが、1年目は準備のための話し合いの時間が多く、2年目と3年目で実践するというパターンが多くなっています。その実践を通して生徒がどのように変わったかということも聞いてみましたが、実はほとんどの教員は「まだよく分からない」と答えています(図6・7)。しかし、何がしかの表現してくれた者もいるので、幾つかご紹介いたします。「教員の視点が変わっていけば、生徒の活動にも反映される」「物事を少し新しいイメージで見られるようになった」「英語や日本語を言語として捉える必要性を感じつつある」「非言語的なテキストを意識的に分析しつつ受容する態度が身についた」「適切な準備があれば、『課題とすべきこと』に気づくことができる」「学校図書館を利用するようになった」「多角的な視点から事象を捉えられるようにな

った」「職業観、雇⽤者・被雇⽤者の関係の理解が深まった」「生徒が変化した印象はないが、数値での変化は得られているので、『種』は植えつけられたと思う」「教訓を引き出すコツを見つけることで、ノート⼊り⽅が変わった」「⾃身の心のあり⽅を客観的に見詰めることができるようになった」といったことが書かれていました。

1-5.教員はどのようなところがどのように変わったか

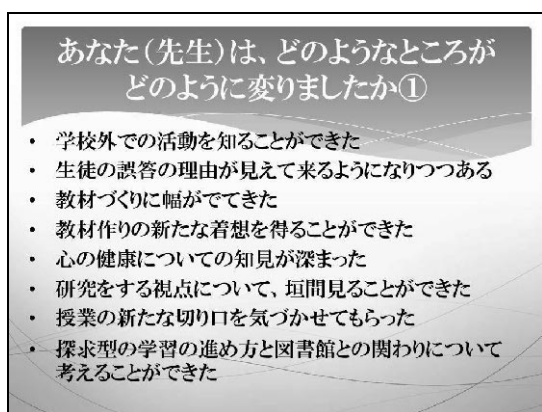


図8

最後に、教員⾃身はどのようなところがどのように変わったかを書いてもらいました(図8)。ここは非常に書きにくかったようで、先ほどの生徒がどう変わったのかという質問と同様に白紙回答が大変多く見られました。しかし、記名式で全員に回答してもらっているので、書いた人間が誰か分かるということからきちんと書いてくれている人もいました。

「学校外での活動を知ることができた」は、イノベーション科研で行った多くの学校訪問を通して、他の学校のチャレンジングな取り組みを見て非常に勉強になったということです。「生徒の誤答の理由が見えてくるようになりつつある」は、なぜこのような誤答をしたのかということについて先生⽅で検討会をしているのですが、その結果だと思⼫います。

その他に、「教材づくりに幅が出てきた」「教材づくりの新たな着想を得ることができた」「心の健康についての知見が深まった」「研究をする視点について、垣間見ることができた」「授業の新たな切り⼊を気付かせてもらった」「探求型の学習の進め⽅と図書館と

の関わりについて考えることができた」という回答がありました。

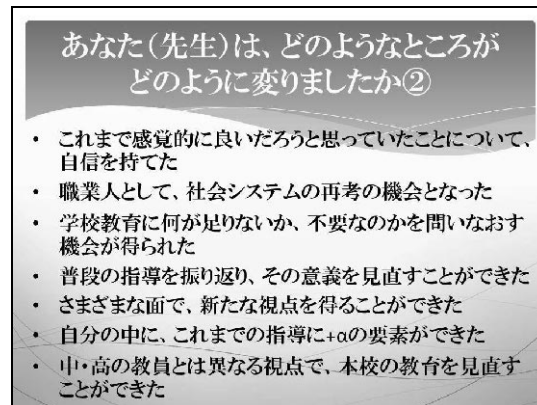


図9

「これまで感覚的に良いだろうと思⼫ていたことについて、自信を持てた」についてですが、大学の先生⽅と実践授業をし、あるいは他の先生⽅の実践報告を聞き、その検討等をしていく中で感じたことだと思⼫います(図9)。これは多くの学校で行われている校内研究会と同じようなものだと思⼫われるかもしれませんが、イノベーション科研で行っているのは、それとは異なります。この授業のこの場⾯で、なぜこの生徒とこのようなやりとりが行われたのかという学校の検討会ではなされる議論ではなく、このような授業を、どのような教材をどのように扱⼫い、どのように進めていくかという、より前段階での議論なのです。このような検討会を通じての記述だと理解しています。

それから、「職業人として、社会システムの再考の機会となった」「学校教育に何が足りないか、不要なのかを問い直す機会が得られた」「普段の指導を振り返り、その意義を見直すことができた」「さまざまな⾯で、新たな視点を得ることができた」「⾃分の中に、これまでの指導に+αの要素ができた」という意見が出ていました。

「中・高の教員とは異なる視点で、本校の教育を見直すことができた」について⼫うと、公立学校の場合、普通の校内研究会のときは教育委員会の指導主事や他校の先生が来られますが、もう少し大きな校外研究会になると、大学の先生が指導助⼫言者として来られることがあります。このイノベーション科研では、どのようなことをするのか、なぜそのようなことをする

のかという問いが、学校教員の視点からではなく、大学教員の視点からスタートしており、そこに附属の中・高の教員が入ってきて、相談しながら授業を行っています。そうすると現場では、そのようなやり方では授業がしにくいということも擦り合わせながら授業を進めることができます。従って「中・高の教員とは異なる視点」については、そもそも出発点が違うことを大前提としているということをご承知おきいただければと思います。

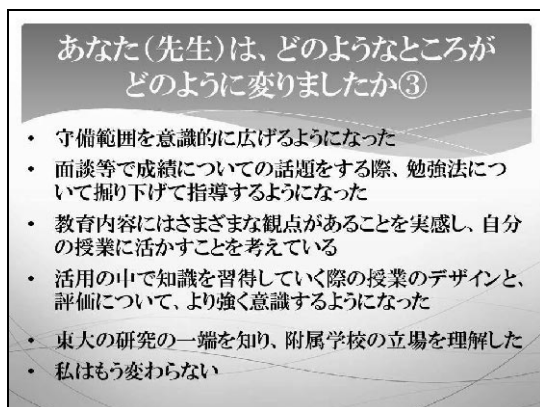


図 10

そして、「守備範囲を意識的に広げるようになった」「面談等で成績についての話題をする際、勉強法について掘り下げて指導するようになった」「教育内容にはさまざまな観点があることを実感し、自分の授業に生かすことを考えている」「活用の中で知識を習得していく際の授業のデザインと評価について、より強く意識するようになった」ということです(図 10)。

2.まとめ

12 のプロジェクトが走ることは、私たち教員にとっては非常に大きな負担であったというのが正直なところです。例えば、普段の授業以外にも、大学の先生と授業をつくるための打ち合わせをします。しかし、それが完了すれば授業ができるわけではなく、当然、実際の授業者として、より詰めた準備をしなければなりません。各プロジェクトに 5～10 名の教員がいるので、その中で相談しながら授業を行っています。つまり、授業の準備も、普通の校内研究会の公開研究授業とは全く違う形で進むのです。さらに、

授業が終わった後もまた報告会等を行うため、日常業務プラスアルファの負担がかかっていたと思います。

しかし、普通の学校教員は恐らく経験し得ないような、非常に貴重な経験ができたと思います。なぜかという、学校とは一体何をするとところなのか、教員とは一体どのような職業なのか、そして、学習指導要領とは一体何なのかということゼロから問い直しつつ、具体的な授業をつくっていくわけですが、これは授業を行うためではなく、研究科の研究の実践の部分の担うためにしているという側面があったからです。そうしたことから、「東大の研究の一端を知り、附属学校の立場を理解した」という回答も見られました。

最後に「私はもう変わらない」と回答した剛の者もいたことをご紹介して、私からのご報告を終えたいと思います。